

緊急救援で大切なのは 公平さよりもスピード

ゲスト

菅波 茂



(すがなみ・しげる) 医師。AMD A (アジア
医師連絡協議会) 日本支部代表。岡山大学医学
部大学院 (公衆衛生) 修了。医学博士。クルド
難民、ピナツボ火山噴火被災民をはじめ、エチ
オピア、ミャンマー、ブータン、カンボジア、
ソマリアなどで難民救援医療を実施。広島生ま
れ、48歳。

☐緊急時は、まず現場に入つてから対策を考える

神津 初めに、阪神大震災のときにどう動かれたのか、お聞きしたいんですが。

菅波 一七日の段階でチームを送ることを決めて、午後四時に第一陣を編成し、神戸に



送りました。それが現場に到着したのは午後の一、二時ですが、それからすぐ活動を始めました。その後も第二陣、第三陣を送りましたが、会員でない方からも参加させてほしいという連絡をずいぶんいただきました。

神津 やはり立ち上がりがとて早かったんですね。

菅波 普通の場合は情報を集めてから対策を立てますよね。でも、こういう場合は、まず現場に入って、それからどうするか考える。これが緊急救援のやり方なんです。だから早いです。考えていると、一日、二日はすぐ経ってしまっ、けっきょく後手にまわってしまいますから。

神津 これまでAMDAが国内でそういう活動をしたことはあるんですか。

菅波 災害は初めてです。私たちは東京都などから委託されて、在日外国人の相談医療などをやっていますが、災害時の救援活動はいままでは海外で行っていて、国内は初めてだったんです。

それに海外の場合は、まず現地にある支部が対応していますから、私たちが入ったときは四日目くらいになっていたわけです。今回は最初から自分たちで対処すべき事態でしたので、その七十二時間以内に何ができるかというのも初めての経験でしたね。

☑医療チームが役割を果たすのは

最初の一週間

神津 実際にはどうでしたか。

菅波 私は主に後方支援をやっていたんですが、メンバーに聞いたところでは、長田の保健所に行っても、保健婦さん自身が被災者で来られていて、何をすればいいのかわからないと呆然とされていたというんですね。他の医療チームも来ていたけど、やはり何をしたいのかわからない。そこで、すぐ巡回を始めたということです。

しかし避難所に行って医療チームが来たと言っても反応がない。地震の直後ですから、混乱していても無理はないんですが。そのう

ち、ホツとされたようで、重傷の人がいるから先に診てあげてくださいとか、そういう配りを被災者の方がされていたということです。また、ある所では口伝えて伝わって、一度に二〇人、三〇人と来られる。そうすると薬が足りなくなってしまう。しまいは鎮痛剤を一錠ずつしか渡せないんだけど、それでも皆さんは非常に安心されるわけです。ただ当初は、薬だけじゃだめだという状況もありましたね。

神津 現在も活動は続いているんですか。

菅波 私たちは緊急救援ですから、すでに引き揚げています。緊急のときに民間が役に立つのは、医療に関していえば一週間なんです。その中でも最初の三日間が大事です。それを過ぎると、徐々に行政が立ち直って組織的な対応をしてくれますから。それと、今まで診てもらっていたお医者さんがいますので、そういう方にお任せするようにしていかないと、これまでの経過がわかりませんから医療事故を起こすおそれもあるんです。ですから、二週間目に地元の医療機関にすべてバトンタッチしました。

☒災害時にはスピードが最優先

神津 いままでいらした世界各地の災害現場と比べて、阪神大震災のときはどう思われ

ましたか。

菅波 都市災害の大きさですね。ただ、ヨーロッパの人たちは戦争災害と見ているんです。日本は戦争がないでしょ、ですから純粹に都市災害と見えますが、彼らは戦争がこういう高密度の近代的な都市で起きたときを想定して、被害はどの程度か、何が起こっているかに関心を示したわけです。たとえばスイスから犬が来ましたよね、六匹。でも人も二〇人くらい来ていました。本当に犬だけで救出するなら、そんなに人はいらぬはずなんです。

神津 被害状況の中で、困っていることはいろいろ報道されましたが、その中でも問題だったこと、あらためて気がつかれたことはありますか。

菅波 一番問題だったのは、水ですね。トイレが使えない状況ですから、食べないんですよ。だから病気になる人も出てくる。ライフラインの中でも、市民生活に最も直結しているのは水だったといえますね。その水の確保をどうするかが一つの大きな問題でした。

ただ、幸いだったのは冬だったことです。街全体が冷蔵庫のようなものですから。これが夏でしたら腐りますから、あっちこちで下痢になる人が多かったと思います。

神津 たしかにそうですね。

菅波 ですから、平時とはものの発想を変えなきゃいけない。どういうことかというところ、行政の人は納税者に対して公平であることが一番重要といって、食糧も公平に配られました。けれど、今回のような災害時に一番大切なのは、公平さという概念ではなくてスピードなんです。公平に渡そうとしてチェックなんかしていますから、ますます遅くなってしまう。これが夏だったら、被災者の手に渡ったときは食糧など腐ってしまうおそれもあるわけです。

去年、ルワンダ難民のゴマへ医療チームを送りましたが、真夏でしたからコレラが発生して、脱水症状で多くの人が亡くなりました。今回、もし下痢をして脱水症状になった場合、医療品も足りなかったし、病院に輸送する車もなかったですよ。ですから、もっと多くの犠牲者が出ていた可能性もあるんですよ。

神津 緊急の場合は、スピードのほうが公平さよりも優先されるべきだということですね。

菅波 そうです。平等に配るにはどうすればいいかなんて考えているのではなく、とにかく早く渡す。非常時と平時ではプライオリティーが違います。発想を変えなければ、本当の支援にならないんです。

◎ボランティアも平時と緊急時では発想の転換が必要

神津 活動について何か気がつかれたことは？

菅波 ボランティアも、平時に活動する場合と、緊急時の混乱状態の中で活動する場合とは発想を変えなければいけないということですね。緊急救援のボランティア活動には三条件あるんです。まず、混乱しているのが当たり前、次に劣悪な環境の中で活動するということが、三番目に自分で仕事を探さなきゃいけないことです。これがすべてできる人が行くといいんです。

神津 なかなか厳しい条件ですね。

菅波 もう一つは、平時にはないパニックを起こす人がボランティアの中にいるんです。今回もたくさん出て困ったんですが、このパニックを起こす人も三つに分けられるわけです。プライドの高い人、使命感に燃えている人、それから未経験者たちですね。こういう人たちは自分のイメージで活動の中に入っていきますから、たちまち適応できなくなってしまうんです。

神津 実際にはどうなるんですか。

菅波 他人を攻撃しだすんです。それで自分を抑えようとするわけですね。これはパニックの初期症状で、他のボランティアの迷惑になりますから帰ってもらいます(笑)。

☒若いボランティアだけに光を当てるのは危険

神津 お話をうかがっていると、先生たちの目からは、あの震災がずいぶん違うものに見えているようですね。

菅波 そうですね。それから今回のボランティアのとらえ方なんですけど、私から見ると五つのグループに分類できるわけです。でも報道に出たボランティアは一種類だけ。それはすごく危険だと思うのですが。

神津 五つというと？

菅波 NGO(非政府組織)と若い人たちのグループ、地方自治体・市町村と地域住民グループ、宗教グループとその関係者、企業と企業内ボランティア、そして避難所の中の自治会とそこに住んでいる人たちのグループです。この五つのグループがあつて、これを全部民間パワーと言うならいいんですが、メディアで取り上げられたのは主にNGOと若い人たちです。なぜ、その人たちだけを一生懸命紹介したのか、これは問題だと思います。

実際には彼ら以外の人たちもたくさん参加しているんです。ここをきちんと把握しておかないと、また日本に大災害が起こったときに、対応を間違えますよ。

神津 どうして若い人たちだけがアピールされたんでしょう。

菅波 ボランティアという言葉は、私が知っているかぎりでは一九七八年のカンボジア難民のときに日本に入ってきたんですね。その当時の新聞に、欧米の若い人たちがわざわざアジアの難民のために駆けつけているのに、日本の若い人にはボランティア・スピリットがないのかと、ずいぶん書かれたんですよ。あのとき日本で初めてボランティアという言葉が市民権を得たんです。わずか一八年の歴史しかないわけです。

民間パワーと言えば先の五つのグループが入るんですが、それをなぜボランティアという言葉を使ったかという点、おそらく自主性ということと言いたかったんじゃないかと思います。宗教関係者がボランティアをするのは当たり前でしょ。地域や地方自治体がやるのも当たり前。企業にしても日頃利益を得ているんだから当たり前。こういった当たり前が多い中で、若い人たちは自主的に行動したと言いたくて、ボランティアという言葉が踊ったんでしょうね。

神津 団体ボランティアはあんまり身近すぎて、それがボランティアだという感覚が私

たちの中になさすぎたんでしょうね。

菅波 いま日本は八方ふさがりでしょ。そういう意味で、若い世代に期待を込めたいという部分があるんでしょうね。しかし私がそれを問題だと言うのは、ボランティアというのは非常に気まぐれな面を持つていると思うからです。もし次の災害のことを考えるんだつたら、組織的対応のできる場所を重要視しなければいけない。市町村や地域住民、各地に支部のある宗教団体、それから企業も各地に事業所を持っていますから組織的に対応できるわけですし、最も頼りになるグループなんです。そのへんを見間違えては、次の対策につながらない。私自身、NGOをやっていますけど、政府の三大復興策の一つにボランティア対策というのがあります。でも、これ全部はずれてるんです。NGOを支援しようとか、NPO（非営利団体）をつくらうとか、そこだけに焦点が当たりすぎて、基本的な対策にはならないと思っています。

☒民間パワーがなぜ動いたのか、何をしたかを見極める

神津 もっと生活に根ざした具体的な対策を打ち出してほしいですね。そうした対策を考えるうえで、ほかに忘れてはいけないことがありますか。

菅波 もう一つ重要なことがあるんです。それは、なぜみんなが動いたのかを確認することです。

みんな何かしたかった——というのが、阪神大震災のキーワードなんです。では、それはなぜかという点、人権的な考え方から行っただけかと思う人が多いわけです。これは簡単に言えば、神様が見ているか見ていないかということなんです。でも、私は人権的な意識からじゃないと思う。日本には相互扶助意識がありまして、それは知っているか知らないかなんです。今回は、みんな神戸を知っていた。だから動いた。奥尻島とか島原のときには、こんなふうには日本中が動かなかったでしょう。

神津 そうですねえ。

菅波 そして民間パワーは何をしたかというと、医療や炊き出しの対人サービスだけだったんですね。行政の対応が遅いと言われていましたが、県庁に一人一職員がいるといつても、本当の対人サービスをする人というのは一〇%くらいで、あとの九〇%は生活基盤、社会基盤などインフラに関係のある職員です。だから行政は対人サービスが不得手というところをもっと出さないといけない。それと、対人サービスはカメラで写せますから絵になるわけですよ。ところがインフラ整備のほうは誰もやってない。そこをはつきりさせ

ないと、見誤っちゃう。別に、何でもかんでも民間がやるべきだと言ってるわけではないんですが、基本的には対人サービスをやっていただけというのは知っておくべきですね。そういう意味で、今回の民間パワーの実態は何だったのか、なぜ動いたのか、何をしたらかを明確に踏まえたうえで、次に何かあったときの対策を立てれば、これは本当に活かせると思いますよ。

☒活性化しなければいけないのは団体ボランティア

神津 今回の震災をきっかけにボランティアという言葉が一躍、四方八方から脚光を浴びて、活動が注目されました。と同時に、ボランティアの理念がわからなくなっている人たちもけっこういるような気がします。

菅波 私は日本人にボランティア・スピリットはあったと思いますよ。ただ、どういう形かという点、地域コミュニティを支える町内会とか婦人会とか、要するに村の共同体のようなものですね。つまり、日本には団体に加盟することによって汗を流すというボランティアの伝統的な風土があったわけです。しかし個人ボランティアの風土はなかった。それがカンボジア難民のときに個人ボランティアという新しい概念が日本に根づいたとい

うことです。

神津 なるほど。

菅波 そこで考えてみると、地方自治体も市町村も、宗教関係も、そして企業も、みんな団体ボランティアなんです。避難所の自治会などは、日本のお家芸ともいえる団体ボランティアですね。けれどマスコミが取り上げているのは個人ボランティアだけなんです。先ほど言われたように、あまりに身近すぎて、当たり前存在になっているからかもしれません。でも日本で本当に活性化しなければいけないのは団体ボランティアで、これが日本の水脈なんですよ。

神津 だから、脚光を浴びた部分だけではない、組織としての力をつけるような方向に進んでいかないと……。

菅波 日本の民間パワーの活性化はないということですね。

☒複眼思考を持って評価すべきところは評価を

神津 世界の国から見れば、日本の国側の対応も評価できる部分はあったように思うんです。

菅波

私たちは精神的なフォローをするためにハーバード大学から準教授を呼んだり、フランスからの医師団を受け入れたりしたんですが、彼らは一様に、ライフラインの復活とかインフラの整備がとても早いと驚いていましたね。それから、もしパリで同じような規模の災害が起こったら、おそらく暴動が起こるだろうとも言っていました。神戸で起こらなかったのは、日本にはそんなに住民格差がないという一つの証明だと思っんですね。そういう面から言っても、日本古来からの団体ボランティアをどう見るか、世界の目からはどう見えるか、そういう複眼思考を持たないと、本当の客観的評価はできませんね。

神津

たしかにそういう視点が抜けていると思いますね。

菅波

若者に期待を持つのはいいんですが、評価すべきところは評価して、長所はどんな伸ばし、短所は底上げしていくようにすることですね。日本の良さについても、きちんと評価しないと次につながらないし、団体ボランティアの長所ももっと伸ばしていけば、日本はもっといい国になるでしょう。それに、これは緊急時の場合だけではなくて、高齢化社会の問題にもつながっていくと思うんですよ。ただ、人間社会のあり方というのは、高年齢化社会には変わらないことを押さえておく必要があるし、また日本人の考え方、もの見方もしつかりと把握しておかないと、単に一時的なもので終わってしまつて、根本的な対

策にはならない気がしますね。

◎人道援助はまず参加することに意義がある

神津

ところで阪神大震災とは別に、AMDAの活動をお聞きしたいんですが、発足はいつ頃ですか。

菅波

正式には一九八四年です。現在、会員は日本で一〇〇〇人くらいいますが、その六割は医療監視部隊です。ほかのアジアの地域からは一四カ国ほど参加しています、多いのはインドとかネパール、フィリピン、バングラデシュ、パキスタンなどですね。

神津

どういう経緯で組織されたんですか。

菅波

実は七二年から活動はしていたんです。クワイ川の上流に農場があつて、そこに医療チームを派遣したのが最初です。その後、七六年にそういうサークルを持っていろいろ大学の学生同士で情報交換しようとして、西日本アジア医学生連絡協議会というのをつくりました。その翌年の会議で、カンボジア難民が出ているということで、私を含めて三名が行ったんです。でも、そのときは何もできなくて、これじゃいけない、医学生るときからお互いに交流しておこうと、八〇年に第一回アジア医学生国際会議を開いたわけです。その



シンポジウム

共生社会とボランティア

OBが集まってAMD Aをつくったんです。

神津 いままで海外で活動していらして、先におっしゃった七十二時間というか、派遣までの様子はどうなんですか。

菅波 アジアで何か起こった場合は、現地の支部がまず動いて、それから他の国のメンバーが支援に駆けつけます。支部のないアフリカなどの場合は一〜二週間経ってからになります。普通は一週間以内に行きますね。最も早かったのはネパールで大洪水があったときで、四日目に入りました。外務省が国際緊急援助隊を持っていますが、私たちのところは受け皿ができていますので、それよりも早く現地に入れるわけです。

神津 さすがですね。

菅波 人道援助というのはオリンピッククなんです。参加することに意義がある。お金を出すんじゃないで、参加です。それまでできるだけ早く。これが、いま世界のヒューマンズムの常識なんです。

神津 これからも頑張ってください。

〈出席者〉

ケント・ギルバート、(15ページ参照)

菅波 茂 (81ページ参照)

笹川 陽平 (55、56、57、58、59、60、61、62、63、64、65、66、67、68、69、70、71、72、73、74、75、76、77、78、79、80、81、82、83、84、85、86、87、88、89、90、91、92、93、94、95、96、97、98、99、100、101、102、103、104、105、106、107、108、109、110、111、112、113、114、115、116、117、118、119、120、121、122、123、124、125、126、127、128、129、130、131、132、133、134、135、136、137、138、139、140、141、142、143、144、145、146、147、148、149、150、151、152、153、154、155、156、157、158、159、160、161、162、163、164、165、166、167、168、169、170、171、172、173、174、175、176、177、178、179、180、181、182、183、184、185、186、187、188、189、190、191、192、193、194、195、196、197、198、199、200、201、202、203、204、205、206、207、208、209、210、211、212、213、214、215、216、217、218、219、220、221、222、223、224、225、226、227、228、229、230、231、232、233、234、235、236、237、238、239、240、241、242、243、244、245、246、247、248、249、250、251、252、253、254、255、256、257、258、259、260、261、262、263、264、265、266、267、268、269、270、271、272、273、274、275、276、277、278、279、280、281、282、283、284、285、286、287、288、289、290、291、292、293、294、295、296、297、298、299、300、301、302、303、304、305、306、307、308、309、310、311、312、313、314、315、316、317、318、319、320、321、322、323、324、325、326、327、328、329、330、331、332、333、334、335、336、337、338、339、340、341、342、343、344、345、346、347、348、349、350、351、352、353、354、355、356、357、358、359、360、361、362、363、364、365、366、367、368、369、370、371、372、373、374、375、376、377、378、379、380、381、382、383、384、385、386、387、388、389、390、391、392、393、394、395、396、397、398、399、400、401、402、403、404、405、406、407、408、409、410、411、412、413、414、415、416、417、418、419、420、421、422、423、424、425、426、427、428、429、430、431、432、433、434、435、436、437、438、439、440、441、442、443、444、445、446、447、448、449、450、451、452、453、454、455、456、457、458、459、460、461、462、463、464、465、466、467、468、469、470、471、472、473、474、475、476、477、478、479、480、481、482、483、484、485、486、487、488、489、490、491、492、493、494、495、496、497、498、499、500、501、502、503、504、505、506、507、508、509、510、511、512、513、514、515、516、517、518、519、520、521、522、523、524、525、526、527、528、529、530、531、532、533、534、535、536、537、538、539、540、541、542、543、544、545、546、547、548、549、550、551、552、553、554、555、556、557、558、559、560、561、562、563、564、565、566、567、568、569、570、571、572、573、574、575、576、577、578、579、580、581、582、583、584、585、586、587、588、589、590、591、592、593、594、595、596、597、598、599、600、601、602、603、604、605、606、607、608、609、610、611、612、613、614、615、616、617、618、619、620、621、622、623、624、625、626、627、628、629、630、631、632、633、634、635、636、637、638、639、640、641、642、643、644、645、646、647、648、649、650、651、652、653、654、655、656、657、658、659、660、661、662、663、664、665、666、667、668、669、670、671、672、673、674、675、676、677、678、679、680、681、682、683、684、685、686、687、688、689、690、691、692、693、694、695、696、697、698、699、700、701、702、703、704、705、706、707、708、709、710、711、712、713、714、715、716、717、718、719、720、721、722、723、724、725、726、727、728、729、730、731、732、733、734、735、736、737、738、739、740、741、742、743、744、745、746、747、748、749、750、751、752、753、754、755、756、757、758、759、760、761、762、763、764、765、766、767、768、769、770、771、772、773、774、775、776、777、778、779、780、781、782、783、784、785、786、787、788、789、790、791、792、793、794、795、796、797、798、799、800、801、802、803、804、805、806、807、808、809、810、811、812、813、814、815、816、817、818、819、820、821、822、823、824、825、826、827、828、829、830、831、832、833、834、835、836、837、838、839、840、841、842、843、844、845、846、847、848、849、850、851、852、853、854、855、856、857、858、859、860、861、862、863、864、865、866、867、868、869、870、871、872、873、874、875、876、877、878、879、880、881、882、883、884、885、886、887、888、889、890、891、892、893、894、895、896、897、898、899、900、901、902、903、904、905、906、907、908、909、910、911、912、913、914、915、916、917、918、919、920、921、922、923、924、925、926、927、928、929、930、931、932、933、934、935、936、937、938、939、940、941、942、943、944、945、946、947、948、949、950、951、952、953、954、955、956、957、958、959、960、961、962、963、964、965、966、967、968、969、970、971、972、973、974、975、976、977、978、979、980、981、982、983、984、985、986、987、988、989、990、991、992、993、994、995、996、997、998、999、1000)

日本財団(旧日本船舶振興会) 理事長。明治大
学政経学部卒。全国モーターボート競走会連合
会会長、米日財団理事などを務める。早くから
船舶振興会内に社会貢献はじめボランティア支
援部署を設け、各種ボランティア団体の援助に
取り組む。東京生まれ、56歳。

興梠 寛 (こうろき・ひろし)

日本青年奉仕協会(JYVA) 事務局長兼研究
開発室長。新聞社を経てJYVA国際部長、事
業部長などを歴任。国内や海外のボランティア
活動の発展のために活動している。教職は日本
社会事業大学、日本福祉教育専門学校兼任講師
など。宮崎市生まれ、46歳。

司会・神津カンナ (46ページ参照)

◎ボランティアは社会に必要不可欠な活動

神津 本日は四人の魅力的なパネリストの方々に、ボランティア活動との関わり方、日本のボランティアの現状、そして共生社会についてのご意見をお話ししていただきたいと思えます。最初に、ケント・ギルバートさんからお願いいたします。

ケント ボランティア活動について話すときに、それが社会の中でどういう位置づけになるかということをまず整理しておく必要があると思えます。そこでアメリカの「福祉四原則」をまずご紹介しておきます。

一番は「自立」です。できるだけ一人ひとりが自立すべきです。これは大原則であって、そのための社会を一生懸命つくってきたわけです。しかし、なかには自立できない人もいます。最初は自立していたけれども事故にあつて障害者になった人、年をとつて体が不自由になった人などです。そういう人はどこに頼ればいいのかというと、家族です。だから四原則の二番目は「家族」です。自立できない人は家族の力を借りればいい。しかし、家族の力では足りない場合もあります。そこで三番目は「民間福祉団体」になります。それでも力が足りない場合は「政府」に力を貸してもらいます。

この自立、家族、民間福祉団体、政府の順番は絶対に崩してはダメなんです。最初から政府に、何でもかんでも要求するというのはいけません。その理由として、新宿のホームレスの例をお話しします。

いま新宿駅には、常時三八〇人のホームレスが生活しています（注・平成七年八月二八日時点）。この人たちにカトリック教会がボランティア活動で、おにぎりを毎朝配っているんです。もう何年も続けられていて、私も英字新聞で知って、家族を連れて手伝いに行つたこともあるんですが、これはかなり大変なことです。ところが、なかには、カトリック教会にばかりやらせて、東京都は何をやっているんだと言う人がいるんですよ。でも、東京都が配るようにしたらどうなりますか。三八〇人が、たちまち三万八〇〇〇人になりますよ。依存症を起こしますからね。ですからこれはボランティアでやらなくてはいけない。それじゃあ都の出番はないのかというと、ありますよ。ホームレスの社会復帰を支援することです。病院に入れて体を治したり、職業訓練を受けさせたり、そういうことはボランティアにはできませんからね。そこに行政の出番があるわけです。そういうふうに分けてやっていかないと、みんな依存症を起こしてきりがなくなってしまうんです。

この話でもわかるように、ボランティアはやつてもやらなくてもいい活動ではなくて、社会にとって必要不可欠な活動なんです。ですから、ボランティア活動を誰でもができる

限りやるべきだということを、まず認識する必要があるんじゃないでしょうか。日本人にはまだその認識がないと思いますね。ボランティア活動は時間とお金に余裕のある人がやればいいのか、私はサラリーマンだからそんな暇はありませんとか、そんなこと言ったら社会は成り立ちません。

◎長寿社会を支える裏の行政

神津 どうもありがとうございます。それでは次に、AMDA日本支部の菅波さん、お願いします。

菅波 二点申しあげます。一つはAMDAの一員としていろんな救援活動をやった経験から、もう一つは開業医をしておりますので、そこから得たことです。

緊急救援をやっていて一番感じましたのは、世界中の誰もが人道援助に参加したいという気持ちを持っていること。にもかかわらず、そのチャンスのない人が非常に多かったということです。どうしてそれがわかったかといいますと、私たちはアジア多国籍医師団とこのをつくりましてアジアとかアフリカで緊急救援をやっているんですが、バングラデシユとかネパールとかフィリピンとか、あまり経済的には恵まれていない国のドクターが

多く参加しているんです。それで、どうしていままでやらなかったのかと聞きましたら、私たちだつてやりたかったんだ、ただそのチャンスがなかっただけだと言うんですね。私もそれを聞いて驚きまして、人道援助は先進諸国の専売特許ではなかったんだなということを強く感じました。

それからもう一つ。一九七八年のカンボジア難民のときに、日本にはボランティアがいないのかとマスコミで一斉に報道されましたけれども、私は、日本は元来ボランティア社会なんだなと、地域医療をやっていると思っています。

その根拠を申し上げますと、世界で一番平均寿命が長いのは日本ですが、税金の率を見ると日本は三五%で、スウェーデンは七〇%なんです。どうして税金の少ない日本が平均寿命で世界一なのか。日本人が特異体質なのではなくて、行政に表の行政と裏の行政があるからなんです。

表の行政は東大を中心とした、非常に偏差値の高い優秀な人たちによって運営されています。一方、裏の行政は地域コミュニティの中で、町内会をはじめとした小さな組織によって運営されています。この裏の行政を司る地域コミュニティの各団体が、実はボランティアなんです。これが安い税金で世界一の長寿を保っている一つの大きな要因では

ないかと思えます。

◎休日の一日は家族のために、もう一日は社会のために

神津 どうもありがとうございます。日本人の平均寿命が長いのは裏行政のせいだという話は初めてうかがいましたが、お医者さんがおっしゃると説得力があつていいですね。

さて、続いて笹川さんにお願ひしたいのですが、日本船舶振興会では四年前にボランティア支援部というのを設置して、活発な活動をなさつてらっしゃいます。では笹川さん。

笹川 いま菅波先生から、日本には元来ボランティア精神があつたんだというご指摘がありました。私もそのとおりでと思います。たとえば明治一六年頃からキリスト教婦人矯風会という組織がありました。また、日本で最大の組織である日本消防協会、これは全国に三六〇〇団体の組織を持っていますが、こちらもずっと活動を続けてきています。そういう長い歴史を日本のボランティアも持っているのですが、その認識がメディアになかつたために、表に出てこなかつたんです。

さて、神戸の大震災があつて「ボランティア元年」ということが言われていますが、さまざまな問題がここに出たと思えます。一つは、ボランティア活動が華々しく展開された

のは事実なんです。それはボランティアだけではうまく機能しなかつたということです。神戸のボランティアでは若い人たちが大勢参加しましたから、新しい息吹がそこに出てきたということは言えるわけですが、それをうまく動かしていたのは、大阪ボランティア協会、YMCA、あるいは神戸ライフケア協会といったこれまで長い活動歴のある組織の方たちなんです。そういうコーディネーターがいてはじめて、若者たちのボランティアがうまく機能したということです。

一方、行政にはボランティアをコーディネートする力はありませんでした。行政は公平とか画一とか手続きとかを大変重視する組織ですから、当然といえば当然の結果なんです。が、そういう中で民間のボランティア活動の重要性がクローズアップされ、みなさん方が認識を新たにされたということは、大きなプラスだつたと思います。

私も船舶振興会ではそういうボランティア活動をなさっている方々を、団体、個人を問わず応援させていただいておりますが、阪神大震災では、約五万件応援しました。その中で私が最も感動したのは、四二万円の申請でした。どんな活動だつたかといいますが、水不足の中で、タオル一本持つて寝たきり老人の体をふいてまわるボランティアです。ここに行政と民間の大きな考え方の違いがあると思えます。

九五五年はボランティア元年であると同時に、戦後五〇年という節目の年でもあります。これまで私たちは経済至上主義といえますか、自分たちの生活をいかに豊かにしていくかということだけを考えて邁進してきました。その結果、ある程度の豊かさは実感できるようになってきました。しかし、その豊かさはあくまでも物質本位のもので、すでに週休二日制も普及し、労働時間一八〇〇時間といわれる今日、人々が休暇に何をしているかという、テレビかゴロ寝が圧倒的に多いわけです。どうして労働組合も経営者側も、増えた休日を使うかという議論をしないのでしょうか。週休二日になれば、一日は自分と家族のため、もう一日は社会のために、あるいは恵まれない人のために使おうという話がどうして出てこないのか、私はとても不思議に思います。

戦後五〇年が過ぎ、企業も良き市民にならなければいけない時代になって、もう政府や行政だけに社会の運営を任せていたのでは日本の国が成り立たないことは、みなさんもお気づきですね。人間一度は死ななければなりません。そのときに、まあ家族のためにも頑張ったけれど、少しは世の中のためにもいいことをしたかなと自分自身で納得できるような生き方というものを、そろそろ考えなければいけないんじゃないかと思えます。

◎豊かに生きるすべを身につけていない男たち

神津 ありがとうございます。しんがりは日本青年奉仕協会（JYVA）の興梠さんです。日本青年奉仕協会は若い人を対象にした「年間ボランティア計画」という新しい試みをなさって、啓蒙を続けているところです。では興梠さん、お願いします。

興梠 ボランティアの世界というのは、どこにいても女性が多いんですね。私どもがやっている「年間ボランティア計画」でも、参加者の三分の二以上が女性です。ですから、日本の男たちはいったいどうしたんだと嘆いていたんですが、今日は男性の方がごく多いんで安心いたしました（笑）。

八〇年代の終わり頃からですか、中高年の男性たちが私どものところにもやってきて、ボランティアをやりたいんだけれどもという相談を受けるようになりました。八〇年代の始めは女性たちの活動が目立つようになってきたんですが、終わりは中高年の男性たちです。けれども、そういう人たちに情報を提供したり、必要な研修の機会をつくったりするコーディネートに話を聞きますと、彼らはどうも扱いはざらざらと言っていますね。どうしてと聞きますと、まず、趣味に疎いと言っています。二番目に、話題が貧困（笑）。三番目に、人間関係づくりがヘタ。四番目に、肩書きにこだわる。そして五番目に、手の汚れる仕事

をいやがる。これは問題ですね。

つまり、日本の男たちというのはこれまで一生懸命、家族を守るため、日本の経済発展を支えるために働いてきたわけですが、残念ながら、豊かに生きるすべというものは、どうも身につけてこなかったような気がします。ボランティアの世界にまで管理主義や競争主義や、市場経済の原理を持ち込むというのは困ったものです。ですから、若いときから仕事や勉強と並行してもう一つの人生、ボランティアでも何でもいいんですが、そういうものを持つべきだと思います。定年退職してからは遅いんですよ。仕事プラスもうひとつの人生。それが、男を魅力的にするカギです。

神津 ありがとうございます。たしかに老人ホームに行きましても、おばあさんのほうはグループで何かをしたりして元気なんですけど、男の方は詰め将棋をしているか、『水戸黄門』を観ているか、ボーっとしているかなんですね(笑)。今日は男性が多いですから、以後の人生をいろいろお考えいただきたいと思います。

行政の意識と態勢を早急に変えてほしい

神津 今回の大震災でボランティアという言葉がクローズアップされましたが、前にも

一度そういうときがありました。超高齢化社会がやってくるという話が出たときです。これからはお嫁さんや奥さんだけでは介護しきれない、といって行政にそれを求めても限界がある。ならばどうすればいいのかというので「共生」という言葉が出てきて、地域社会を支えるにはボランティアが必要だという話になったわけです。そういう素地があった上に大震災のことがあって、一躍ボランティアが脚光を浴びました。

それで次の質問といたしまして、阪神大震災の前と後で、行政、あるいは市民の意識、あるいは地域社会に何か変化が起きているのか。起きているとすればそれはどういうものなのか、という点についてみなさまのお考えをうかがいたいと思います。それではまたケントさんから。

ケント 私はあまり変わっていないと思うんですよね。行政は本当はボランティア団体をうまく使わなければいけないのに、使い方をまだ覚えていないと思います。覚えようという動きはあると思いますけど。でもこれは緊急課題なんですよね。もし近い将来東京に同じような地震がきたら、この前と同じように、十分な対応はできないと思います。ですから早く整備していただきたい。

神津 行政とボランティア団体の関係とか、ボランティア団体の活動形態で、アメリカ

と日本で違うところがありますか。

ケント たとえば災害が起きたときに統括担当をするFEMA（連邦緊急事態管理庁）という政府組織があるんですが、ここは災害救助を実際にやるのではなく、各地域のいろんな団体を取りまとめる連絡センターの役割を果たしているんです。

あと面白いなあと思ったのは、フロリダでハリケーンがありましたでしょう。あのとき物資が足りないとか、変なところに滞っちゃって届かないという事態はまったくなかった



ケント・ギルバート氏

んですね。なぜかというところ、パソコンがどこにでもあって、みんなが使い方を知っていたからなんです。ですからこれから民間ボランティア団体をうまく使おうとするんだったら、パソコン通信を覚えさせて、何かあったときにすぐに情報を交換できるようなシステムをつくることも必要ですね。アメリカはもう、その段階はできています。

神津 もう一つ、ケントさんはモルモン教の教会のお仕事もなさっていますが、ボランティア活動に対しての日本人とアメリカ人の違いはありますか。

ケント アメリカで便利なのは、キリスト教の教えの中に、人を助けてあげる義務があるという、ボランティア精神があることです。

うちの支部では、先ほどお話しした新宿のホームレスのことを知って、カトリック教会に浅草周辺の金曜日のおにぎり配りを任せてほしいと連絡をして、それを毎週やっているんですよ。

これは、私たち大人も充実感を持てますが、子供たちを参加させることによって、ボランティア活動の喜びを覚えさせることができます。これは家庭教育の中でもとても大事なことだと思いますよ。

☐ボランティアが期待論から実在論に変わった

神津 菅波さん、AMDAはずいぶん早くから神戸で動いたようですが、そのへんで何かお感じになったことは。

菅波 ケントさんはあまり変化はないと言われたんですけども、ここで日米摩擦を起

こす気はないんですが（笑）、ものすごく変わっているわけですね。何がというと、意識が変わったんです。

一番大きな意識変化は、阪神大震災を通じて、日本人が希望と自信を持ったことですね。つまり、その前の高齢化社会に対するボランティア活動は、あくまで期待論だったわけですね。ところが今回はテレビ等を通じて実際のボランティアを見たわけです。つまり、ボランティア期待論からボランティア実在論になったということで、ものすごく大きな希望を持ったと思います。



波茂氏

ただ、ここで間違っはいけないところが一つあります。私たちAMDAやNGO（非政府組織）、それから若い学生たちがマスコミに登場しましたけれど、本当は、今度の震災で爆発した民間パワーには五つのグループがありました。一つはNGOと若者ですが、次が市町村と地域住民。とくに岡山県

なんかでは大きな動きがありました。三番目が宗教者グループと関係者。四番目が企業と関係者。そして五番目が避難所における自治会です。

この五つが民間パワーだったわけです。その中で騒がしい少数派がNGOとか大学生のグループでした。ところがどこの世界でもサイレント・マジョリティーという、沈黙する多数派がいる。この多数派が動いたのが、今回の阪神大震災だったわけです。だからこそボランティアが実在するということをみんなが実感できたんだと思います。

それで政府も、この民間パワーを活用すれば国づくりができるのではないかと、NPO（非営利団体）法案の整備に走ったわけです。したがって私は、いままで表面に出てこなかった四つのグループを、いかにして国づくりのエネルギーの前面に押し出すかが、大きな勝負どころだと思っています。それで医者も、これを機会にいろんなところでグループができて、医者同士のネットワークを結んでいます。そういう意味で、阪神大震災の後、みんなが自信と希望を持って、一つの将来に向かって歩みを始めていると思っています。

☒NGO、企業、行政のパートナーシップの時代

神津 笹川さんはどうお考えですか。

笹川 戦後五〇年、素晴らしい日本の国が完成したと私は思うんですけれども、一つ残念に思うのは、健全な消費者運動とか市民運動というものが根づかなかったことです。こう言うの一部の人からお叱りを受けるかもしれませんが、大きな目で見ると、力にはなりえなかつたと思います。すべて政府、行政がやってくれて、国民一人ひとりがそこに参加しているという意識が乏しかったと思うんです。

ですから、大震災は不幸な出来事ですが、これからの日本を考えたときに、これを契機にしてボランティア運動が大きく花開いていかないと、これからの日本の国づくりができないのではないか。それはべつに政府や行政だけの問題ではなくて、国民一人ひとりが参加しなければならぬテーマだと思いますね。

神津 そのへん、興梠さんはいかがですか。JYVAが神戸でどのように動かれたかということも含めて。

興梠 私たちは、ボランティアセンターとか民間のボランティア協会、二〇団体ぐらいとネットして、阪神・淡路大震災の人々を応援する市民の会というのをづくり、一月一八日から現地で動き始めました。それで、三月末までの統計をとってみますと、私どもが開いた拠点に、ボランティアをやりたいと言ってこられた方が、だいたい二万五〇〇〇人で

す。多い日には八〇〇人ぐらい来て、列をつくって待っていたいて、オリエンテーションをして活動するという状況でした。そのときのボランティア志願者の約六割は、三〇歳以下の若者でした。これは若者が動いたという一つの根拠にもなっています。そういう面では、大変感動する場面でした。

それから、これも特筆すべきことなんですが、一月一七日に震災が起きたとき、すぐにある団体から電話がかかってきました。それは経済団体連合会です。日本のトップ企業の集まりである経団連の社会貢献部から、私たちも一緒にやれませんかという連絡が入ったんです。これは二〇年前にはとても考えられなかったことです。それこそ二〇年前には、学生や市民運動家たちが経団連のビルの周りをデモ行進していたんですから。ですからこの二〇年で日本の市民活動も、そして企業も、ある面では成熟したといえるのではないでしょうが。

その意味で、民間のNGOと企業と行政のパートナーシップの時代が始まったということ強く感じました。ですから、日本の社会はボランティア活動に関心を持つことよって社会の質を変えていこうとしているのではないか。その中で行政が民間の活動をちゃんと認めるとか、企業がNGOときちんと役割分担するとかして、パートナーシップの時代

をいかにつくっていくかが、これからの課題だと思います。

□とにかく、何か一つやってみる。□

神津 皆様のお話をうかがうと、いろんな部分で若者が動いた、企業が動いた、意識変革があったということが非常によく理解できました。たしかに意識は非常に高まって、若者はそれこそ突き動かされたように動きました。だけど、日本人の特質なのか、動くときはワーッと動くけれど、少し時間が経つとその情熱も静まって、また元に戻ってしまうということがありますよね。ですからいまの機会を逃さずに、この盛り上がったものを育てていかなければいけないと思うんです。共生社会というのが今日のテーマですが、これを本当に実現していくには私たちはどうすればいいのか。ボランティア活動にしても、では個人として何をしたらいいのか、どのようにすれば世代の特色を生かした活動ができるのか。そのあたりのことを、おひとりずつお願いいたします。

ケント 何をやればいいのかというと、やりたいことをやればいいんだと思いますね。とにかく一つやってみて、いやだったらやめればいいんです。一つのことをやりだしたら、いつまでもそれを続けなければいけないんだと思っているかもしれませんが、そうじゃな

いんですね。ボランティア活動をやり出せば、団体としては継続的な活動を期待するでしょうけれど、自分が継続的にやろうと思うならば、自分もエンジョイしなければダメだと思います。

だいたい、ボランティア活動は多少苦しくても、基本的には楽しいはずですよ。それを通して充実感を得ることができるんですから。そういう結果が出ないような活動に参加しているのだったら、違うことをやったほうがいいですよ。

そこで一つ提案なんですけど、毎週とか毎月というのが厳しいのならば、年に一回でもいいと思うんです。私が子供の頃に家族が年一回やっていたのは、父親が毎年困っている家族を見つけてきて、家族全員がお金を出し合ってその家の子供たちにプレゼントを用意する、サンタクロースの代理のボランティアでした。これは年に一回しかできませんから。でも私はこの活動を通じて、ボランティア活動の喜びを教えてもらったんです。

神津 たしかにそうですね。近ごろの若者はマニュアル人間だと言いますが、大人もだんだんとそうなってきた、サークルに入っても、さあ私は何をいたしましょうかと言って、指示を待たなければなかなか動けないというところがある。ボランティア活動でも、能書き言っていないで何か一つやってみるといふ始め方がいいのかもしれないね。

☐「たらたら人生」から一歩踏み出す決意を

神津 菅波さん、いかがでしょうか。どうやって共生社会を実現していったらいいのか。
菅波 実は、共生社会の成功モデルが日本にあるんです。それは過疎地域なんです。岡山県に加茂川町という、人口六三〇〇人、年間予算三〇億円の小さな村がありますが、ここは日本で初めて国際貢献条例というのをつくりまして、地域住民がどんどん海外援助に出ていつてるんです。この村の人たちが一番思っていることは、自分たちに力があるとか能力があるとかいうことではなくて、過疎の村は思いやりがなければ生きていけないということなんです。

そのことを町長以下住民全員がしっかりと共有しているわけですね。ですから、ほかに困っている人がいれば、どんどん思いやりの心を発揮しようとする。だからみんなとても元気なんです。こういう相互の思いやりの心が、共生する場合の一つのヒントになるんじゃないかと思えます。

もう一つは、いまでも地域を支えている町内会とか婦人会、子供会などに積極的に参加していく。あるいはNPOで自分がやりたいことをやる。そういう活動を通して共生して

いくことが大事だと思います。

課題としては、ケントさんが言われたように、パソコンでいろんな情報を誰もが集められるように、情報ネットワークのシステムを整備していくことですね。

一番よくないのは、「定年になったら」とか「時間に余裕ができたら」と言っても何もしないことです。そういうのをへたらたら人生」というんですけれども（笑）、そういうへたらたら人生」から一歩足を踏み出す決意が一番いるんじゃないかなと思っています。

神津 ありがとうございます。みなさん、へたらたら人生」はダメだそうですよ。では菅川さん、お願いいたします。

☐行動することがボランティア

菅川 ボランティアとは何かという、言葉の意味をしっかりと押さえておかなければ、思っているけれども、考えているけれどもと言って行動に移らないんです。ですから、ボランティアの語源を調べてみました。本によりますと、中世のヨーロッパで、教会でミサをしているときに、オルガン奏者が神に対する感謝の気持ちを即興曲で表わすことを「ボランティア」と言ったそうです。そこからボランティアという言葉が出ていくわけ

☐ボランティアをやる自由とやらない自由

神津 さて興梠さん、せっかくですからボランティア活動をなんとか地域に根づかせて、もう少し広げていきたいと思うんですけど、そのへんのコツといいますか、上手なやり方がありますでしょうか。

興梠 まず、活動する自由を認めること。いままでボランティアというのは、やるほうも気恥ずかしい、名を名乗れないという部分があったし、やってないほうからは、あの人は変わった人だ、特別な人だ、という色眼鏡で見られるような部分がありましたね。だから、ボランティアをする自由をみんな認めていくことが大切だと思います。

す。

つまり、自分の心をどう表現するかということが基本にあつて、それを人のためにということになるわけですから、思いやり、あるいは相手の立場になつて考える、だれか困っている人のために何かしてあげたいという気持ち、それが行動になつて初めてボランティアになるわけです。ですから、動かなくてはまったく話にならないですね。



笹川陽平氏

今日は災害ボランティアの話が多いんですが、災害時のためだけにボランティアはあるわけじゃなくて、日常にもなくてはならない。ですから、ボランティアに参加しないならチャリティーという形でもかまわないんです。これが案外大きな金額になつて、いろいろ役に立っているんです。

とにかく、どのような形にしる動かなければボランティアにならないのであつて、行動することがボランティア

だと理解してください。

神津 日本人は真面目なんです。だからボランティアの中に入るときも、こうしなればいけないとか、ああしちゃいけないとかいろいろ考えてしまふんですね。真面目という言葉が適切かどうかはわかりませんが、そういうふうにいるいろいろ考えてしまうために、ボランティア活動の枠を自分でかえつて狭くしてしまつている気がします。そこを乗り越えれば、もう少し違うものが出てくるんじゃないかという気もするんですけど。



興 裕 寛氏

でやってみるという程度でいいと思います。こう言うと、ボランティアは責任を持たなくてはいけない、問題解決能力を持たなくてはいけないと非難する人がいるんですが、ボランティア活動をしている間に、そういうことは自然と教育されていくものなんです。そういう力がボランティア活動にはあると思

それと同時に、ボランティアをやらない自由を認めることも大事だと思います。ボランティア社会だということをやあまりにも言いすぎると、今度は、しない人たちが攻撃されることになる。ですから「やる自由」と「やらない自由」をみんなが認め合えるような、自然な生活のライフスタイルを身につけていくべきだと思います。

二点目ですが、イギリスに「水に入らなければ泳ぎを覚えることはできない」という諺があります。これはイギリスで、子供たちにボランティア学習をさせる機会をもっとつくろうというときによく使われる諺です。つまり、社会の中で社会的な体験をしなければ、人間としての生き方を覚えることができないということなんです。ですからボランティア活動をする機会を子供のときからつくっていくことが必要なんです。障害があるなしにかかわらず、すべての子供たちにボランティア学習を行う機会を、学校教育の中でつくっていくべきだと思います。これは活動ではありません。教育というのは強制力を伴いますから、ボランティア学習と考えたほうがよいでしょう。つまり、ボランティアになるための準備学習ですね。これはぜひ必要です。

そしてそういう子供たちが育ったら地域でいろんな活動ができるように、ボランティア情報を提供するシステムも必要になるでしょう。行政のボランティア情報だけを提供する

機関ではなく、それこそパソコンのネットワークがあつたり、FAX情報通信があつたり、NGOや民間団体も情報提供できるようなものがないですね。そういうことの整備も、これからしていかなければなりません。

私たちが一步を踏み出すためには、勇気を持って、自分の足で情報のありそうなところを訪ねていくことだと思ふんです。そのときには、自分の好きなことや趣味、自分が持っている技術、あるいは日頃やってみたいと思つていること、そういうことをボランティア

います。現に私自身、二〇年くらいの間活動を通していろんなことを勉強してきました。ですから、好きなことをまずやる。やってみたいことをやる。ということから考えたほうがいいんじゃないですか。

◎自分が幸せな人がボランティア活動を

神津 興柁さんの一つおうかがいしたいのは、ボランティア活動をやっていると、途中で行き詰まるというか、広がりやが止まっちゃうときってありますでしょ。人間が増えていかないとか、活動内容がマンネリ化してみんなの気持ちやがだんだんしぼんでくるとか。そういうときの乗り越え方として、何かありませんか。

興柁 お医者さんに診てもらおうしかないです。

神津 お医者さんに診てもらおう!? (笑)

興柁 私は、休むことを勧めます。しんどくなったら休憩すること。それから、負けそうになったらやはり逃げるんですね。逃げている間にエネルギーを蓄えて、相手がひるんだ隙に「回し飛び蹴り」でやっつけるとか。

神津 ウワーツ! (笑)

興柁 つまり、ボランティア活動、市民活動というのは、物差しで考えないで、もっと自由自在にものを考えていくということなんです。しなやかに、したたかに……。

神津 逃げたり、休んだり、放り投げたりしていいわけだ。

興柁 私は休憩をお勧めいたしますけれども、それ以外の治療法があるかどうか、ちょっとお医者さんがいらっしやいますので。

神津 そうですね。菅波さん、何かありますか。お医者さんとして。

菅波 私は、「AMD Aに入る人に対しては条件があります。その一番の条件は、あなたが幸せであることですよ」と言ってますね。私は基本的には、ボランティアは幸せな人がしたほうがいいと思っています。なぜなら、幸せな人というのはいくらでも活力が出てきます。したがってその活力を他人に持っていきけるんです。

神津 たしかに疲れて不幸せな人に何かしてもらっても、こちらも申し訳ないというか、いやんなっちゃう感じもありますからね。やるほうの側が元気でなかったら、それは失礼というものですよね。

菅波 そうだと思います。

神津 病原菌うつしちゃうといけないし (笑)。

ケント 私は、新宿のホームレスのおにぎり配りに参加しようと思って、カトリック教会に電話したんですよ。私、手伝いに行きますからって。そうしたら、「ぜひ来てください。ただし二カ月先まで予約済みですから、その後で」って言われました。驚きましたね。

菅波 でもそれは、幸せな人が多いということ、いいことじゃないですか（笑）。

ケント いいことだと思いましたが、よし、これなら私が手伝ってやらなくても大丈夫だ。じゃ、違うことやろうか、なんて思ったんです。

神津 笹川さんはいかがですか。

笹川 ボランティアを始めると、義務感や責任感が出て、途中でやめられない、くたびれると言いますが、ボランティア活動というのは自分のためにやるんですからね。他人のためにやるんじゃないんですよ。困っている人に手を差し伸べて、その人が喜んでくれる姿を見て、自分自身が幸せな気持ちにならなくちゃいけない。そのところを間違えないようにしていただきたいと思います。

私たちがボランティア活動をしている中で疲れたり、いやになったりするときというのは、自分が何か思い違いをしているとか、活動仲間との人間関係で問題があるとか、活動そのものとは関係のないところで疲れてしまうのではないかという気がします。

◎世界に向けて人道援助の提案を

神津 時間もなくなってきましたので、最後におひと方ずつ、これだけは言っておきたいということがあれば。提言でもメッセージでも何でもけっこうですので。

ケント 私が言いたいことは、ただ、やりなさいということだけなんですけど（笑）。やらなければどんなに楽しいものかわからないんだから。これ非常に不思議なもので、いま笹川さんがおっしゃったように、他人のためにやるんじゃないんです。ついでに人が助かるんですけれども、まずは自分の生活を充実させるためですからね。

菅波 今回の阪神大震災も含めまして、一つ、ずっと抜けている論点があります。それは、海外の百数カ国から支援と救援の申し込みがあったという事実です。それに対してこれから日本がどういうふうに応えていくかという問題があるんです。

実は、阪神大震災の後、サハリン大地震がありまして私たち飛行機で行ったんですけれども、飛行場で帰ってくれと言われたんです。そこで私たちは、阪神大震災のときにロシアからいろいろ支援してもらって日本人は非常に喜んでいただんだと。今回はサハリン大地震でみなさんが困っているのだから、日本人は何かをしたい気持ちでいっぱいなんだと思



神津カナナ氏

す。

やはり私が提案したいことは、ボランティア活動をしやすくするような社会的支援システムをきちんとつくり上げていくために、市民一人ひとりがしっかりと監視をし、意見を言うていくことをしなければいけないということです。とくに今回の震災以降、中央省庁の

いやりの心を伝えたいです。すると中に入れてくれて、現場まで軍用機を飛ばしてくれました。ですから、思いやりの心というのは、世界中どこでも非常にわかりやすいということがわかったんです。

それから、日本が海外に緊急救援に出かけていくとき、まだまだ官と民の連係プレーがうまくできないんです。AMDAが阪神大震災のときすぐに動けたのも、サハリンにすぐに行けたのも、実は日本船舶振興会から電話一本でお金を動かしてもらえたからなんです。人道援助や緊急救援は、もうゼニカネの話ではないと判断できる究極の親切だと私は思うんですが、これはタイミングの勝負なんですね。その機を逃すと効果が半分以下になる。ですからそのへんを日本はしっかり考えなければいけません。それは国際的にも大きな信頼関係を結ぶことにつながります。戦後五〇年という節目を迎えて、「人道援助大国日本」「究極の親切運動をする日本」というコンセプトを、世界に向けて提案していければいいんじゃないかと思っています。

☑ボランティア活動支援のシステムづくりに市民の声を

笹川 私も五六歳になりました、最近周りでポツポツ人が亡くなるようになってきまし

た。人生を振り返ったときに、ああ私の人生はこういうものだったのかという中に、何か一つささやかなことであっても、社会のためにいいことをしたというものがあることは、あの世に行くときのみやげとしては、最高のものではなからうかと思っております。先にもふれましたが、戦後五〇年、物質万能の中にわれわれは埋もれてきたわけですが、自身自身の心というものをもう少し大切に、充実した人生の一部としてボランティア活動に加わるといっても、素敵なことではなからうかと考えております。

興梠

ちよつと硬い話をしますが、

やはり私が提案したいことは、ボランティア活動をしやすくするような社会的支援システムをきちんとつくり上げていくために、市民一人ひとりがしっかりと監視をし、意見を言うていくことをしなければいけないということです。

連絡会議、検討会議も始まりましたし、各政党間でもボランティア活動をしていくための税法上の措置とか、新しい法人をつくるための法案の検討はなされているわけです。しかし、全国的な盛り上がりがありますが、いまひとつないような感じがしますね。やはり専門家だけがこの問題を検討するのではなく、市民が主体的に行政活動を支援し、またチェックしていく必要があると思います。

ボランティア活動が自由で主体的で、責任を持った活動だとするならば、そういう活動をしているグループや団体が、税法上や社会的な面でも支援されるような法的システムをきちんとつくり上げていくことに対し、私たちは声を上げていかなければならないと思います。

また、ボランティア活動をやりたいと思う人の相談に乗ったり、情報を提供したり、必要な入門講座をやったり、活動の拠点を提供してくれるような推進機関、いわゆるボランティアセンターが、もともっと地域の中にできていき、そこが地域住民の参加によって運営されるということがあってもいいと思うんですね。そういう拠点が地域の中にあるかどうかというのは、やはり日本のボランティア活動の発展を左右するのではないかと思えます。

アメリカやイギリスを見ると、そういうボランティアの推進センターのようなものがたくさんあるんですね。ですから日本も、行政のタテ割りの中ではなく、市民の人たちが運営に参加して、多様な活動をネットワークする地域のセンターをどんどんつくっていくべきだと思います。

神津 阪神大震災の後、若いボランティアの方からこう聞かされました。三日ぐらいの間、神戸には究極の理想社会があったと。道で行き交うと誰もが、「大丈夫ですか」「何かお手伝いできることありませんか」「食べるものはありますか」と互いに声を掛け合うやさしさにあふれた社会があったと。

もちろんその裏側には、人間の欲望が渦巻いた恐ろしいことももしかしたらあったかも知れないけれど、私たちが本来持っている人間的なものをすべて出した究極の理想社会というものが見えたと。

それが震災の中だったから非常に残念であったけれど、それがもし普通の生活の中にも見えるようになったら、これほど素晴らしいことはない。人間にはそういう社会をつくる力があるのだから、そういう理想に向かって進んで行かなければいけないんじゃないだろうか。

「ボランティア新時代」の旗手たち

1996年4月25日 第1刷発行

編者——産経新聞生活情報センター

企画協力——日本財団

発行者——前嶋 孟

発行所——オーエス出版株式会社

〒101 東京都千代田区神田錦町3-14 神田NSビル3F

TEL 03(3295)1658

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

©Sankei Sinbunsha 1996, Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

私はこの話を聞いていて感動しました。私たちはまだまだ、やっていかなければいけないこと、変えていかなければいけないことをたくさん抱えていると思います。しかしやはり理想だけは捨てないで、そんなこと言っちゃって無理だよとか、どうせダメだよとか思わないで、少しずつでも前に進む努力をしなければいけないときに来ているんだろうと思います。自分にできることから、とにかく一歩を踏み出したいと思います。

みなさん今日はありがとうございます。